

白藍塾オリジナル

2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・看護医療学部

課題文は2つ。どちらも灰谷健次郎著『子どもに教わったこと』の第8章「子どもは小さな巨人」の一部。著者が小学校教師だったときに体験したできごとについて書かれた文章だ。課題文は、罪を犯した少女が自分の心を直視して書いた詩を中心に、少女と接する教師と母親の姿勢を間接的に描き出している。それに対して問題1と問題2の2つの設問がついている。設問のパターンは例年とほぼ同じだ。

問題1で語られるのは、万引きをした少女のエピソードだ。ある少女が母親にうながされて、教師に罪を犯した事を告白する。その少女に対して、教師である著者は、自分の苦しい気持ちをごまかさずに文章化することを勧める。こうして、自分をしっかりと見つめた完成度の高い詩が完成した。

文章中の傍線部「そんな力」とは何であるのか、また著者がどのようなかわり方をすることで、その力が引き出されたのかを説明することが求められている。

「そんな力」とは、少女が自分の罪を認め、つらさに耐えながら自分の心をはっきりと見つめることによって優れた詩を書くことができたことをさす。そして著者である教師は、頭ごなしに叱るのではなく、何よりも子どもが自分をしっかりと見つめることを求め、それをやり切るまで傍にいて待つというかわり方をしている。基本型Aを応用して、まず「そんな力」とはどのような力なのかをズバリ書いてから、それを詳しく説明した上で、著者がどうかかわることで「そんな力」を引き出せたのかをまとめると良いだらう。

問題2は、課題文の2つ目の、少女が後に書いた詩を読んで、母親が少女とどのように向かい合おうとしたか、自分の考えが問われている。

この詩からは、少女が以前に罪を犯した店の前を母親と一緒に通りかかったとき、その前を素通りしたり隠れたりしようとする少女に対し、母親が店の前に連れて行き、少女が罪を犯したときとは違う成長した少女であることを店の人に宣言し認めてもらった様子が読める。

少女の苦しんでいるときに母親もともに苦しみ、少女が罪を認め、しっかりと反省した後は自信をもって自分を出して良いという承認を少女に与えている。そうした母親の向かい合い方をまとめた上で、それが少女に自分自身を取り戻させたことを説明するといいたいだろう。

問題2の制限字数は400字だが、通常の四部構成の「問題提起」でズバリ結論を示し、それを検証していくようにするといい。「意見提示」の「確かに…」の部分では、母親には別の向かい合い方も選択肢としてあったことを述べ、「しかし」で切り返し、自分の考えを説明していくとよい。

なお、この問題は、患者の苦しみに同情して、優しくするつもりで、結果として患者が病気から逃避する方向に向かわせてしまうのではなく、患者の苦しみに共感しながらも、患者の自ら病気を治す力を引き出し、治ったときには患者が自信を持ってもらえるようにサポートする医療従事者の姿勢に通じるものだ。教師を医師、母親を看護師になぞらえて考えてみるとわかりやすいだろう。ただし、文章中に医療従事者との類比について書く必要はない。ここに述べたことを理解しながら、あくまでも課題文に即して答えるのが望ましい。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>